

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年3月1日発行
(毎月1回1日発行)
第16巻第3号 通巻177号

3 月号

2021



瓜坊の来よあたたかき冬なれば

枯れきりし野にささやかな水の音

寒林に来て寒林の声を聴く

一月一日居る筈のなき妻の席

筆擱いてあかあかと年改まる

菰卷の一樹一樹のあたたかし

懐炉背に蟹の小路の佃煮屋

ぽつぺんがそのまま母の手文庫に

書初めのことさら太き筆選ぶ

大草鞋掲ぐ山門しぐれ来る

石蹴つて冬眠の蛇起すなよ

半ばまで氷瀑となる四度の瀧

枯野とは風の息づくところなり

筆擱いて

主宰作品

増成栗人

荒川心星



残照の沖

あり余るほどの日を享け柚子は黄に
猪垣を結ふ霧深き里に結ふ
高野槇の奥より恋の鹿の声
残照の沖あり大根煮てをれば
大きめの燭を仏間に入れて冬
水鳥にあをあをと冬来てゐたり
神苑の矮鶏に静かな冬の雨
いてふ降るかぼそき音を立てて降る

何ごとともなき数へ日の夕茜

いきいきと煮炊きの炎雪降り

文机の上に赤べこ松過ぎぬ

水草の流れのかたち寒日和

冬深し外堀といふ迅き流れ

八幡の水湧く音も寒に入る

ビルの隙どかりと雪の伊吹山

たまさかの冬の青空むすびの地

赤べこ



半谷洋子

谷口摩耶

白鳥

白鳥の首ゆるやかに傾げたる
手のひらを裸木に当て励ましぬ
笹鳴のしきりに聞こゆ我が厨
はじめての料理の試作日脚伸ぶ
大根おろしは夫に任せて夕支度
冬けやき目指して靴の試し履き
春近し机上のメモの多かりき
探梅の人がちらほら矢切村

ちよつとそごまで 第22回

鈴木 崇

今回は出張の旅山形編、
山形も出張で回ることが多かった。各地
の思い出を綴ってみる。

まず、食用菊が一般的であることを知らな
かった。刺身のつまなどの添え物のイメー
ジだったが、それを食すとは！ 食用菊は
酢を加えてさつと茹でたあと水で冷やし、
おひたしで食べるのが一般的だそうだ。定
食屋のメニューに出ていたので頼んでみ
た。色鮮やかで、シャキシャキとした歯ざ
わり。私が食したのは、黄色い菊だったが、
淡い紫色の「もつてのほか」は独特の香り
と味の良さで『食用菊の横綱』と評されて
いるらしい。なんでもこの愛称は「天皇家
の御紋を食べるとはもつてのほか」や「もつ
てのほかおいしい」からの転化という。

鶴岡市は仕事で初めて訪れた地だった
が、印象深い。かつての庄内藩の城下町。
鶴岡生まれの作家、藤沢周平は、作中に「海
坂藩」として鶴岡の町並みや風土を描い
た。藤沢は青年期に結核治療のため入院し
た病院で俳句と出会っている。院内の俳句

サークルのようなものに誘われたのがきつ
かけて作句を試みた。先生格の方が係わっ
ていた俳誌「海坂」の会員にもなった。「海
坂藩」の由来は俳誌名であったのである。

閑古啼くここは金峰の麓村

藤沢周平

藤沢の句は『藤沢周平句集』（文春文庫）
に俳句関連のエッセイと併せてまとめられ
ている。金峰山の麓の村は藤沢の生育地。
ここには現在、記念石碑が建てられてい
る。

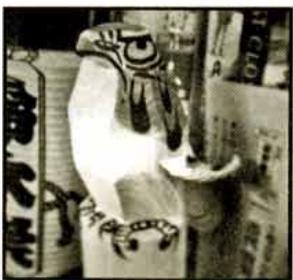
仕事の合間に現地の取引先の方がいくつ
か観光施設を案内してくれた。羽黒山の五
重塔は壮観であった。参道に続く道沿いに
宿坊が立ち並んでいるのも忘れられない光
景だ。

黒川能という庄内地方に伝わる伝統芸能
がある。旧正月にあたる二月一日に王祇祭
で演じられる神事能である。八〇七年に創
建された春日神社の氏子によって五百年近
く演じられてきた。保存会が作られてお
り、神社の近くに資料館がある。訪れるま

で知らない郷土芸能だったので、興味深く
見て回った。仕事とは全く関係なかったの
だが、ためになった。

出張最終日が米沢市だった時に、駅のお
土産コーナーで「お鷹ぼつぽ」を見つけ、
買って帰った。「お鷹ぼつぽ」は米沢市笹
野に伝承する郷土玩具である。サルキリと
いう刃物の一刀彫りで作られている。野趣
に富みながらも、薄く削いだ木片の反り返
りで羽を表現しており、繊細な技術が込め
られたすばらしい芸術である。

一番ポピュラーな「お鷹ぼつぽ」の作品
を購入したが、ほかにも「尾長どり」や「餅
つき兎」などいろいろなお作品があるので、
いつか再訪した際には別の作品を購入し並
べて飾りたいと思っている。



米沢・お鷹ボツポ

詩 作品抄

大和まほろばつんつんと葱畑 林 未生

障子越しの日が文机に波郷の忌 佐藤あさ子

立て掛けし箒の無聊冬に入る 吉清和代

善悪は諸刃に似たり黙阿弥忌 ありかわみのる

煤逃げて一幕見席の和事かな 足立枝里

真ん中のくぼむ俎板山眠る 横尾かな

もみぢ散る風が奏でるやうに散る 遠藤 泉

馬柵に干す少年の靴冬ぬくし 水谷はや子

アヒージョに牡蠣を五六個冬の月 後藤久美子

鳩の笛湖のゆふべを深うせり 坂入喜代枝

船の名に丸のある理由秋うらら 井上つぐみ

種の名を袋に記し種仕舞ふ 中川幸恵

括られず刈られぬ萩に雨の音 山内宏子

熊鍋やとうとうと夜が降りてくる 森 祐司

消えたるは一重瞼の雪女郎 石垣真理子

にほどりのよき隔たりに潜きけり 藤原明美

夫ひとり棲む山里に冬がくる 小林和子

風と遊び風に遊ばる枯落葉 和田 遊

冬風や欠けた硝子の海の色 花本智美

霜月や玉子二つのオムライス 綾戸五十枝

増成栗人 選

「霾」(つちふる)とはモンゴルや中国北部で強風のために吹き上げられた多量の砂塵ダイじんが偏西風に乗って、「黄塵万丈」といわれるほど物凄い量で日本に飛来する現象。気象用語では「黄砂」である。

三月から四月に多いのは、大陸にまだ草が生えそろわない季節のためである。九州では特にひどく、日射量が減る「霾晦」(よなぐもり)の状態となり、室内にまで塵が積もったりする。

つちふるやいつか拳を握りをり 鴻司

霾

特集

俳句に詠まれた霾

荒井一代

春晴れているのに空が淡黄色に霞んでみえたりすると黄砂がやってきたと知らされず。

モンゴルや中国北部の黄土地帯で吹き上げられた多量の砂塵が偏西風に乗って日本まで飛来する現象の黄砂は気象用語であり、歳時記では、「霾」つちふる。

霾やわが青春の宮崎に
森 澄雄
霾や宰府にのこる大礎石
六井 太
霾や鋭きものに砂洲の嘴
鷹羽狩行
霾や江口の遊女探ねあて
加藤楸邨

とくに飛来の多い九州では多く詠まれています。宮崎宮、大宰府に寄せる強い望郷を包むかのような霾の季語。砂洲の嘴は天橋立でしょうか、大阪の江口といずれも場所の明確さがより印象を強くしているようです。

真田き夕日霾なかに落つ
中村汀女
ぼんやりとしかし霾なかに沈む大きな夕日はいつも
飯田蛇笏
の色なのでしょうか。
飯田龍太

霾の陽に祈祷の鐘のきこゆなり
飯田龍太
霾の尾根夜をいただきて遠ざかる
飯田龍太

「霾」は「ばい」ばい

日本列島を覆う霾も、ここ山梨においては鐘の音からも稜線からもやわらかな静寂が感じられます。

尼寺にかかる鯨絵霾晦
宮坂静生
粥うまき奈良に来てをり霾晦
森 澄雄
霾ぐもり啓蟄ぐもり重なれり
右城暮石

日射量が減ってしまう状態の「霾晦」よなぐもり。
尼寺の鯨絵、奈良の粥と、遊子の一日を味わう中では霾晦に鬱陶しさは感じられません。

花曇りらしくも見えて霾れり
高濱年尾
二荒山墨絵ほかに霾れり
松崎鉄之介
殷亡ぶ日の如く天霾れり
有馬朗人
ジンギスカン走りし日より霾れり
同

「花曇り」「墨絵ほかし」と、日本の美しい風土を際立たせる表現が霾れりと呼応しているようです。又、時空を越えて殷、モンゴルへと思いを馳せてゆく句の広がりも。

近年大気環境問題として取り上げられてもいる黄砂ですが、『中央アジア探検記』を胸躍らせて読んだ記憶を呼び起す「霾」の探索となりました。

そして最後に仮名書きのあたたかさをこの二句より。

つちふるや埴輪にまるき耳の穴
半谷洋子
つちふるや祖父の日記にある私
谷口摩耶

真田きた日霾なかに落つ

中村汀女

田辺満穂

霾黄砂・つちかぜ等とも言われ季語として春の項に入っているが最近の日本では秋口にも観測され氣象庁から黄砂情報まで出されるあまり歓迎されない中国大陸方面からの「霾」である。掲句の作者中村汀女は九州熊本生れの俳人。中国や東アジアから飛散してくる黄砂が真っ先に届く福岡辺り。街中を黄色い砂がすつぱり覆い、いわゆるよなぐもりの一日。その中を今、まさに大きな夕日が街の彼方に落ちてゆく。真っ赤な夕日とつちふる色が重なり大陸的な色彩の景となる。まことに大きな叙景詩。

しかし現今の私達には全く厄介な代物である。公害汚染の悪

霾の一句

「霾」
——特集

「霾」を詠んだ自分の俳句、または「霾」が詠まれた愛誦の句と、その句についてこのエッセイ、俳句のなかでの「霾」について語っていただきました。

出会いであった。モンゴルや中国北部の黄土地帯から飛来する空の色を変えるほどの砂塵——西日本への影響は関東の比ではない、と福岡の知人は語る。

二十数年前に発表された掲句、中国の社会情勢を詠んだものである。毛沢東の文化大革命以降の中国！先行き不穏な政情を視界ままならぬ（霾ぐもり）に託して絶妙この上ない。大串章さんをしてリベラルの行く末を案じた社会性の俳句……。氏には同時期に、

満州に埋め来しめんこ黄砂降る 章

の句もある。幼少期を大戦後の混乱の中国で過ごされたのが、その大陸への思いがあればこそ大国への危惧を静かに訴えている。

つちふるやいつか拳を握りをり

吉田鴻司

小澤 冗

私が鴻司先生の指導を受けることができた期間は、五年足らずの短い間であったが、ベレー帽の似合う瘦せぎす小柄の愛嬌のある風貌と厳しくも適切に選をされる師の姿にはいつも心惹かれるものを感じていた。

瘦鴻司と呼ばれ詮なし花木種

鴻司

の一句は自らを素直に表白された句として親しまれている。

鑑賞に挙げた一句は、『平生以後』所収の平成十七年の作品であるが、瘦身経量の師には黄砂の降る強風の中の吟行はかなり厳しい一日となったのであろう。黄砂と強風に耐えつつ、いつか拳を強く握り締めていたといっているのである。

化するばかりの環境の中で掲句のような詩のある「霾」の一句が授かるであろうか。

つちふるや大和の寺の太柱

大峯あきら

畑田久美子

「霾」とは黄砂のこと。

春、中国大陸の黄河流域の砂や土が春風によつて舞い上がり、偏西風に乗って、海を越え日本列島に降りしきる。多い時には遠くが黄色く霞んで見える。関西に生まれ育った私は、町全体が薄く、危うい感覚を持ったことを覚えている。

黄砂の中の大和の寺の光景が目に見え部。広々とどっしりとした寺の佇まいと、御仏達の慈悲に溢れたお姿、そしてエンタシスと言われているギリシャ建築様式の中程がどっしりとした太い柱が、それらをお守りしているかのよう、そこにある。

若い頃、よく歩いた大和の寺々、御仏達への憧憬を懐かしく思い起こさせてくれる名句です。

亡命も失脚も霾ぐもりかな

大串 章

小林良作

もう五十年近くも前の春のこと、ペランダから望む南の空が何が薄茶色にくすんでいた。連れ合いが「何これ、いやだ、砂っぽいわー」と言う。当時、言葉も知らなかった黄砂・黄砂との

黄砂強風に愚痴を言わずに、さっぱりと諧味のある一句となしているところに師の逞しさを感ずるのである。

同十七年、癌の宣告を受け、摩耶さんとともにお見舞いに伺ったのであるが、淡々と落ち着き払った態度には感銘すら覚えた記憶があり、人間とは斯くありたいものだとの思いを強く噛みしめたのであった。

片虹のほのぼのとして癌告知

鴻司

つちふるや大和の寺の太柱

大峯あきら

草柳 忍

私の住む神奈川も最近黄砂の影響を受けるようになったが、以前はほとんど生活に影響がなかった。霾という季語、実は今回初めて知ったくらい馴染みのないものだった。この句はそんな私に想像の翼を与えてくれた。

大和から寺へ、寺から太柱へと黄砂に煙る景色が次第にフォーカスされていく。古色蒼然とした景色は点描画のように見える。「霾」より仮名書きの方がこの情景に合っている。

ところが、最後にフォーカスされた一本の太柱。この柱の形状からその由来を辿れば、海を渡り、大陸の砂漠地帯を通り、はるか古代ギリシャにまでたどり着く。長い歴史の往来や様々な様式や色彩が、降り積もる砂と層になって今を作っている。そう思うと古いだけではない新鮮な息遣いも感じられるようだ。大和という土地だからこぞできた小さなタイムトラベルだつた。

茶庵閑話 33
虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>



羽音集

増成栗人 選



立て掛けし箒の無聊冬に入る
冬ざれや鏡に著き口の皺
冬うらら後る歩きを試しけり
吊革や一人一人の十二月
二人してけふ恙なく根深汁
空の青みづうみの青小六月
冬空へメタセコイアは枝ひろぐ
もみぢ散る風が奏でるやうに散る
回廊に八手の花の影しかと
道端の名もなき草に冬の蜂
にほじりのよき隔たりに潜きけり
椎落葉踏みて始むる次の章
毛糸編む樹の囁きを聞きながら
野をゆくに即かず離れず雪螢
寒林の影伸びやかに相寄らず
納戸よりあれもこれもと冬仕度
木枯や玄関先の猫の声
種の名を袋に記し種仕舞ふ
はふはふと湯気を吹いては衣被
柿すだれくぐりて縁に腰下るす

松戸 吉清和代

大阪 遠藤 泉

船橋 藤原明美

会津 中川幸恵